

通話を終えて、佐竹は携帯を助手席へ転がした。ハザードを消し壬生へ向かう車線へ入る。混雑が予想される国道二十号を避け、県道三十五号で相模原方面へ出る。それが一番早いだろう。起伏の多い山道は否応なしに賢吾との記憶を思い出させるが、今はもうそれを遠い過去の出来事だと思える自分に安堵した。呪われた場所を浄化したことにより自分も変わる、そんな気がした。あとは無事に浩二の元へ帰り着くだけだ。タンクローリー横転の事故は偶発だろうか、それも、天命の揺さぶりか。

対向車も街灯もない曲がりくねった山道を一定のスピードで走行する。ある程度の標高差があるにも関わらず道の両端にはガードレールすら取り付けられていない。道幅は狭く、対向車が来たらアウトだ。相模原まで約十キロ。左カーブで緩やかにハンドルを切った時だった。手足の延長線上で異変が起きた。ファンが強制停止しラジエーターへの送風が止まった。パワステがまったく効かない。ファンベルトが切れたのだ。ライトを消せば十キロくらいは走行可能だが、この暗闇の中それは自殺行為だった。佐竹は舌打ちした。浩二がファンベルトのことを指摘した時にちゃんと見ておけばよかった。このまま走行を続けていけばあと数分でウォーターポンプが停止する。エンジンを切らなければヘッドが焼き付き、切ればダイナモ発電が出来なくなる。選択を迫られた。ここで停まってJAFを呼ぶか、十キロ走行に賭けるか。

山道は急勾配の下りへ差し掛かった。直線の向こうは急カーブだ。佐竹はクラッチを踏みながらシフトダウンし、ブレーキを踏んだ途端に自分の顔色が変わったのが判った。ジュリアスパイダーのブレーキペダルは何の抵抗もなく床へ届き、そのまま上がってこなかった。加速する前にファーストへ入れエンジンブレーキをかけようとしたが無駄だった。シフトレバーはただの棒と化し、どこへ入れてもニュートラルへ戻ってしまう。ジュリアはみるみる加速していく。残るはサイドブレーキだ。右手を掛け思い切り上げた。手首を痛めただけでびくともしない。

佐竹は歯を食いしばった。パワステも効かない今ハンドルが切れない。このまま行けば崖へ転落する。メーターへ目を遣ると水温計がHで振り切れていた。エンジンが焼き付けば、衝突の衝撃で爆発しかねない。スピードメーターがあつと

いう間に百を振り切った。激しい縦Gが身体をシートへ押し付ける。絶体絶命だ。咄嗟に携帯へ手を伸ばしリダイヤルしようとしたが、電話は滑り落ちたのか、どこにもなかった。

浩二。

せめて、記憶を消してやらなければ。

二〇一六年九月二十二日、伊豆大島。

「……えますか？ 真澄先生？ あっ！ 桐島先生！ 真澄先生が目を覚ましました！」

野村早苗のほとんど絶叫に近い声がフェードインして、すぐに遠ざかっていった。入れ替わりに聞きなれた桐島の足音が近付いてくる。網膜に焼き付いた茅葺屋根の古い山門の映像が、遅い間隔をおいて点滅しながら消えていく。龍介はもう一度目を閉じた。長くて白い指。左手だ。あの手が引き戸を開けておいてくれたのだ。

誰の手だろう？

「真澄、聞こえるかね？」

目を閉じたまま、龍介はゆつくりと頷いた。

「今は何年か判るかい？」

「にせん……じゅうろくねん……」

「きみの今いる場所は？」

「伊豆大島……」

桐島の囁き声が耳元で聴こえた。

「修祓は終わったようだ」

誠吾。

「きみは丸二日眠っていたのだよ」

「そうなんですか・・・」

誠吾は、どこにいるのだろうか？

「大丈夫だよ」

大きな手の心地よい重みを額に感じた。

「必ずきみに逢いに来る」